

市原市草刈遺跡出土の有角石斧について

榊原 弘二・土屋潤一郎・宮城 孝之

はじめに

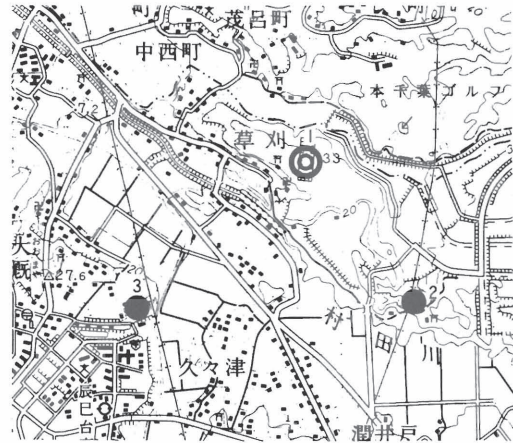
千葉県市原市草刈に所在する草刈遺跡は、住宅・都市整備公団による千原台ニュータウン建設工事に先立ち、昭和54年以降継続して調査の実施されている広大な遺跡である。

すでに昭和54、55年度調査対象の草刈A区については報告書（註1）が刊行されている。

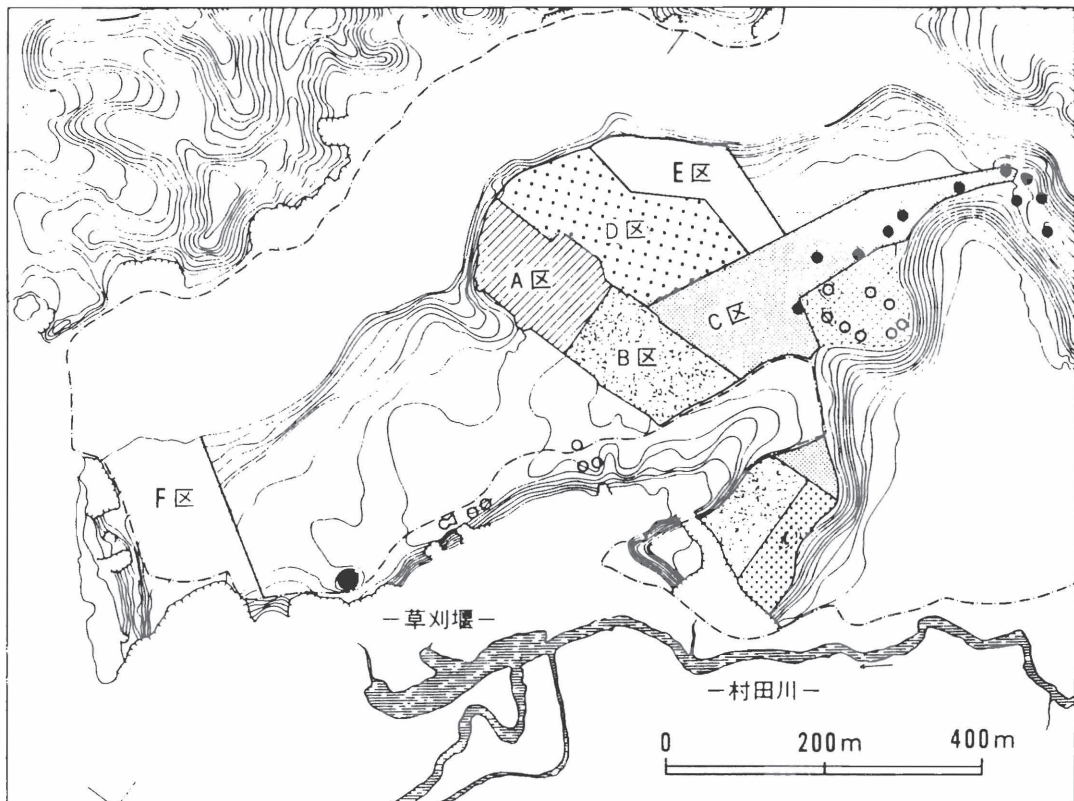
ここに紹介するのは、昭和59年度調査対象の草刈E区及びF区で検出した2軒の住居址とその出土遺物である。

遺跡は東京湾にそそぐ村田川に面し、村田川から分かれる支谷とに挟まれた島状のほぼ独立した台地上に立地する。標高は30m前後である。

このうち草刈E区は支谷に面した北東斜面を主



第1図 遺跡の位置(1/50,000千葉)
1. 草刈遺跡 2. 川焼台遺跡 3. 大既遺跡



54年度調査
 56年度調査
 保存区域
 ● 調査終了古墳
 事業区域境界線

55年度調査
 57年度調査
 ○ 未調査古墳

第2図 草刈遺跡調査区全体図
（『千原台ニュータウンII』より転載・一部修正）

とする20,000㎡の調査区で、縄文時代早期及び古墳時代前期から奈良・平安時代にわたる各時期の遺構・遺物が検出されている。ここからは古墳時代前期（五領期）の住居址から有角石斧1点が出土した。

一方、草刈F区は台地最西端のやや支谷側に傾斜する13,500㎡の調査区で、縄文時代早期、弥生時代中・後期、古墳時代前期から中世まで、きわめて多岐にわたって遺構・遺物が検出されている。ここからは弥生時代中期（宮ノ台期）の住居址から有角石斧2点、環状石斧1点のほか土器、石器のきわめて良好な資料が出土した。

以下、その住居址及び遺物について記すが、調査直後のため接合を要する土器等は割愛させていただく。

E 区の住居址及び遺物（第3・5図）

住居址 調査時遺構番号149号址で、ややゆがんだ隅丸長方形を呈する。長径7.2m、短径6.0mを測る。ピットは主軸上に2個検出されたのみ。炉は検出されなかった。北側コーナーから西壁中央にかけて古墳時代後期の溝が走る。また南側コーナーを鬼高期の住居によって切られている。

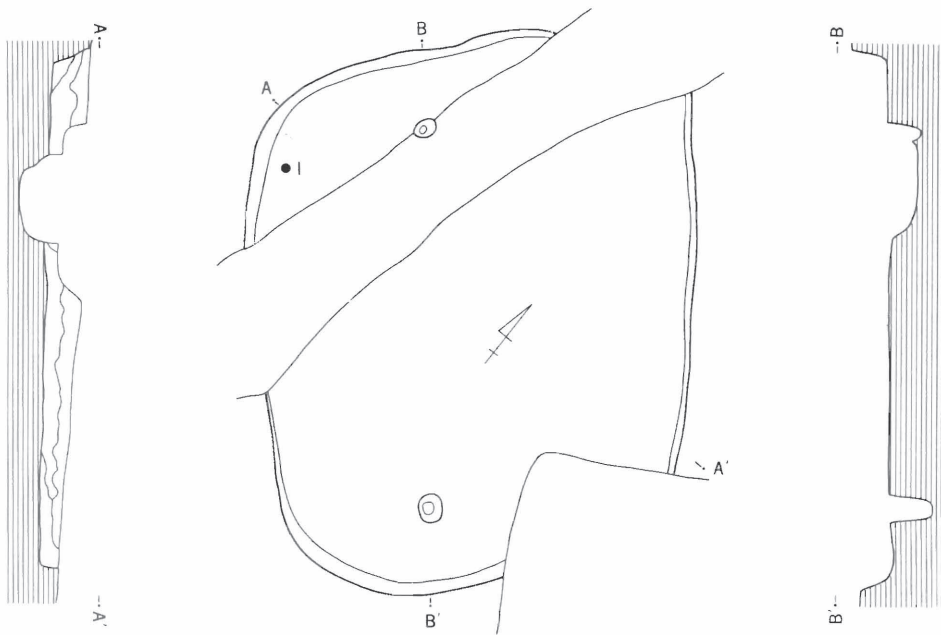
遺物 有角石斧は溝によって切られわずかに残存した西側コーナーの近く、覆土中位から刃部を西

に向けB面を上にして出土。他の出土遺物はやや少なく、完形品では壺形土器が1点出土している。時期は五領期と考えられ、住居址は当該時期と判断される。

第5図の1が出土した有角石斧である。柄部を欠損し、両角部の先端を欠く。残存長13.0cm、刃部両端間の長さ8.2cm、残存角部間の長さ8.3cm、柄部3.8cm、最大厚2.5cmを測る。両角部の側縁にわずかの敲打痕をとどめるほかは、全面非常によく研磨され、光沢をもつ。B面左側角部の欠損は大きく、A面からの打撃による。また、B面右側角部は両面からの打撃によるものと考えられる。柄部の欠損は割れくちがやや丸味をもち、欠損後再生、使用されたと推察される。刃部形状はいちょう形に大きく開き、両刃で部厚い巾広の刃部を形成する。使用によるものと考えられる先端のつぶれは中央で最も大きく、側方になるにつれその度合いは小さくなるがいずれにせよつぶれは全面にわたる。石材は安山岩である。

F 区の住居址及び遺物（第4・5・6図）

住居址 調査時遺構番号307号址で、隅丸方形を呈し推定長径9.6m、短径8.6mを測る。北東部分3分の1を壁柱穴をめぐらす五領期の住居址に切られ消失している。主柱穴は4個と推定される。南



第3図 E区住居址平面図(1/100)

壁近くに入入口部と思われる小ピットと付属施設と考えられる有段のピットが検出されている。段をもつピットからは周溝に向かって浅い溝がのびる。周溝は全周すると考えられる。壁は北に向かって徐々に低くなり35～5cmを測る。炉は消失している。
遺物 出土した土器は弥生時代中期宮ノ台式の良好な資料であり、住居址は宮ノ台期と判断される。2の有角石斧は、南壁ぎわの周溝上から、B面を上にし刃部を東に向け出土。まったく欠損のない完形品である。全長15.9cm、刃部両端間の長さ5.2cm、角部間の長さ7.5cm、柄部3.7cm、最大厚2.7cmを測る。両面に縦方向の稜をもつきわめて特徴的な形状である。中心線の両わきに細かい敲打を加え浅い凹部をつくり出し、凹部によって挟まれた中央を稜として浮き出させている。稜は刃部先端から2cmほどの位置から徐々に高まり、刃部と両

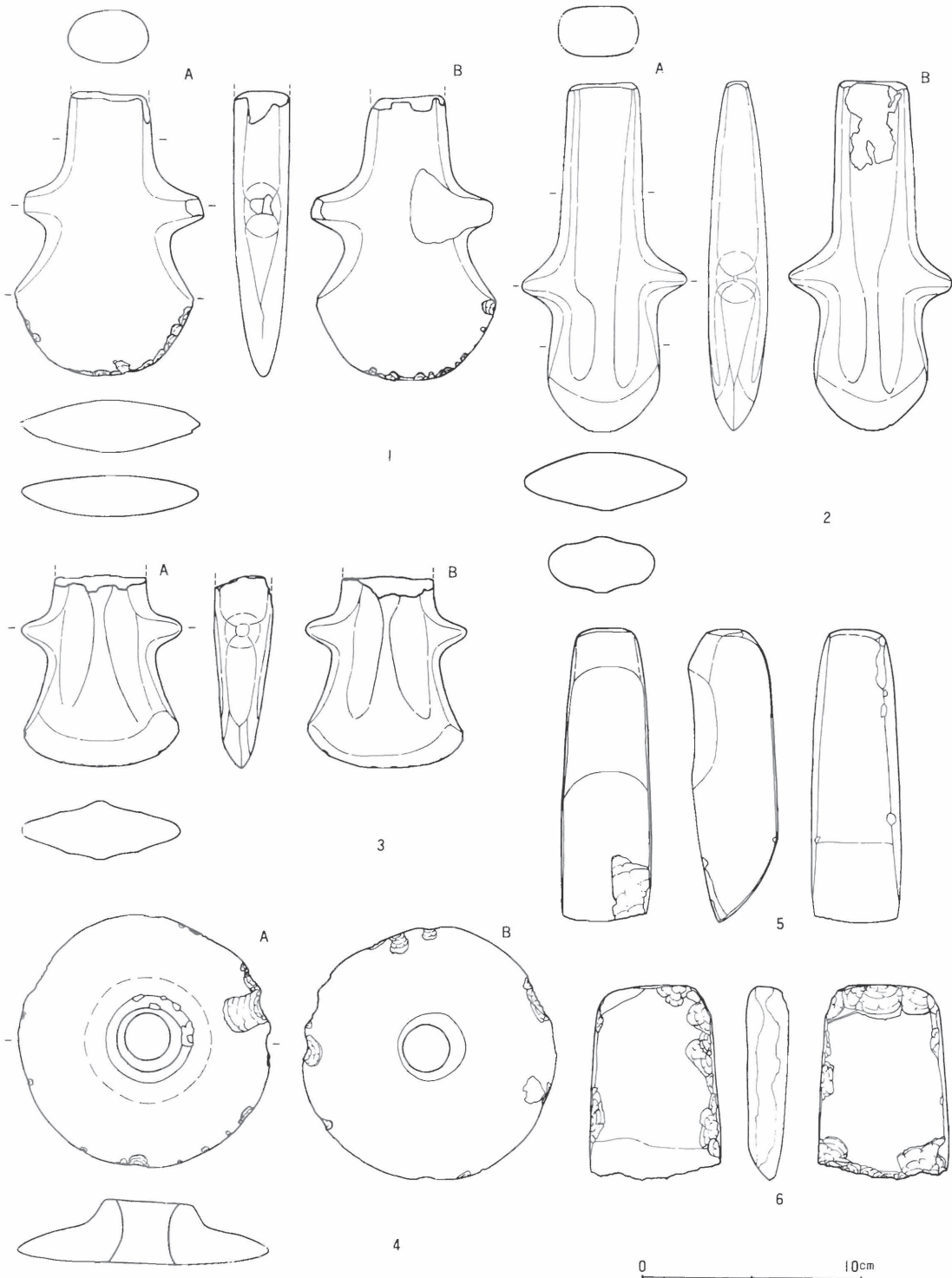
角のほぼ中間で最も明瞭となった後、柄部に向けて徐々にきえていく。敲打痕は両面の凹部と角部側縁にみられる。また柄部には敲打が深く研磨のゆきとどかない部分がわずかに存する。しかしそれ以外の部分はよく研磨されている。刃部は両刃で鋭い。中央が著しく突出する反面巾がないのが特徴で、3の有角石斧と形状を異にする。石材は安山岩。3は東壁と柱穴の中間、やや床面から浮いた状態でA面を上にし、刃部を西に向け出土。柄部の欠損以外は刃部、角部ともに完存する。残存長8.8cm、刃部両端間の長さ7.1cm、角部間の長さ7.4cm、最大厚2.7cmを測る。2と同様に両面に縦方向の稜をもつ。稜は角部の先端をむすぶ線からやや刃部に寄った位置で最も明瞭となる。両面の凹部は研磨がゆきとどきわずかに敲打の痕跡を残存させる。敲打痕はこのほか角部縁辺に少々認



第4図 F区住居址平面図(1/100)

められる。研磨は全面にわたり、刃部は特に念入りに行われている。刃部形状は撥形を呈し、2と大きな違いをもつ。両刃だがB面にやや片寄る。

欠損した柄部の形状は2の柄部とほぼ同様と推定される。石材は安山岩である。



第5図 住居址出土遺物 (1/3)



第6図 住居址出土遺物 (7・8・9 1/3, 10~13 1/4)

4の環状石斧は西壁ぎわ、床面からやや浮いた状態で、凸面を下にし西側に傾いて出土。直径11.6cm, 中央孔内径2.2cm, 最大厚2.9cmの完形である。A面の突出はきわめて大きく明瞭である。両面及び孔内はともによく研磨されている。縁辺の剝離はわずかだが両面からの打撃によるものである。石材は閃緑岩。5の抉入石斧は完形で、住居址中央の覆土中から出土。全長13.5cm, 巾4.1cm, 厚さ3.9cm。刃部は一度欠けているが研磨し再生している。刃先は鋭い。石材は砂岩。6は刃部に著しい使用痕をとどめる扁平片刃石斧である。覆土中出土。全長8.9cm, 巾5.6cm, 厚さ1.9cm。石材は砂岩。7は南壁近く、床面出土の太形蛤刃石斧。完形で微細な欠けを刃部にもつのみ。着柄部両わきに明瞭な敲打痕をとどめるほかはよく研磨され、刃は鋭い。全長14.5cm, 巾7.6cm, 厚さ4.3cm。石材は閃緑岩。8は住居址中央、床面からやや浮いて出

土した太形蛤刃石斧である。基部を欠損する。残存長12.8cm, 巾7.3cm, 厚さ4.2cm。風化が著しい。石材は砂岩。9は覆土中から出土した小型の扁平片刃石斧である。全長4.8cm, 巾2.1cm, 厚さ0.9cm。刃は鋭い。石材は砂岩。このほか砥石と思われる軟質砂岩が8点ほど出土している。

土器は甕形及び壺形土器が出土しているが、ここには完形で出土した壺形土器のみ図示した。10は環状石斧の近くから出土。13と接して横だおしの状態であった。器高20.2cm, 口径5.0cm, 胴部径11.9cm, 底径5.2cm。ナデ肩で下膨れの胴部である。頸部に櫛状工具による波状文を付す以外、全面へら磨き。内部には赤色顔料が頸部近くまで充填されていた。また、顔料の付着は口縁部まで認められる。色は鮮やかな赤色を呈し、覆土の土はまったく混在していない(註2)。11は南西コーナー近くの覆土中出土。頸部のくびれがゆるくずんどう

な器形。器高16.2cm、口径6.1cm、胴部径9.2cm、底径4.3cm。口縁から胴部中央まで刷毛によるナデ。下半部はヘラ磨き。10と同様に赤色顔料を充填している。量はやや少ない。内側の頸部から底部にかけて赤色顔料の付着が認められる。12はミニチュア土器といってもよいもので西壁周溝上から出土。器高9.7cm。ヘラナデによる調整で、内外面ともに赤彩されている。13は10とともに出土した小型土器で、器高8.7cm。口縁部のみ横方向のナデ。他は全面ヘラ磨きが行われる。

以上のほか、完形に近く復元可能な甕形土器が2個体ほど出土しているが、接合を要するため図示できなかった。なお、2個体とも宮ノ台式の良好な資料である。

まとめ

以上簡単に概略を述べたが、以下で住居址及び遺物について若干の検討を加える。

まずE区出土の有角石斧であるが、五領期と考えられる住居址の伴出遺物としうるか省察の必要があろう。浅利幸一氏の報告(註3)でもわかるように、有角石斧がほぼ弥生時代に限定しうるような資料傾向にある中で、本例は最も時期の降る例とすることができよう。しかし、古墳時代前期において、この様な石器製品が実際に使用されたとは考え難く、住居址とは分離して扱う必要があろう。ここでは覆土混入遺物と考えておきたい。

次にF区の宮ノ台期の住居址だが、有角石斧2個体と環状石斧の共伴例は今までに例がなく、きわめて貴重な資料である。また、赤色顔料の充填された壺形土器や磨製石器がセットで出土しているなど特異な遺物内要であり、住居址の特殊性がうかがえる。有角石斧について、表裏ともに明瞭な稜を持つ例としては宮ノ台期でははじめてであろう。稜を持つ既出例は、東京都北区浮間町例、千葉県市原市南向原例、茨城県市岡市高浜町例などがある。研究史上、新田栄治氏が述べたように「稜をもつものが後出的」であり「稜のないものから稜のあるものへという変遷がうかがえる」(註4)とする意見が再三にわたる分類の趨勢を占めている。こういった中でF区2例は弥生時代中期後葉に位置する稜をもつ例として、出土例の中でも古いものに属する。従って上記のような意見の修正及び再考の必要が出てきたといえる。

千葉県下の有角石斧出土例は、ここに報告した3例のほか、市原市の南向原古墳1例、祇園原貝塚1例、台遺跡1例、御林跡遺跡2例、菊間遺跡1例、成田市関戸遺跡1例、旭市1例、船橋市古作貝塚1例、香取郡干潟町1例、同郡大栄町1例、同郡小見川町良文貝塚1例、同郡多古町2例、印旛郡印旛村1例の合計18例ほど出土している(註5)。

一方環状石斧は、埼玉県熊谷市池上遺跡などで最近出土報告(註6)があり、わずかずつ出土例も増えつつある。弥生時代の環状石斧についてはまた別に検討される必要があろう。

おわりに

有角石斧や環状石斧は今もって出土数の少ない遺物であり、今後の調査による出土を期待するものである。草刈遺跡は依然調査が継続しており、今後の調査で新たに有角石斧などが出土することは十分に考えられるほか、弥生時代の集落のあり方など徐々に明らかになるものと考えられる。

なお、石材鑑定は千葉大学近藤精造教授にお願いした。末筆ながら記してお礼申し上げます。

(文責 宮城)

註

- 1) 『千原台ニュータウンII』 文化財センター 1983
- 2) 調査直後のため赤色顔料の分析は行っていない。
- 3) 浅利幸一 「千葉県市原市国分寺台出土の有角石斧」 『伊知波良』 2 1979
- 4) 新田栄治 「有角石斧の再検討」 『考古学雑誌』 60-4 1975
- 5) 『南向原』 1975
『市原市菊間遺跡』 1974
『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書II』 千葉県文化財センター 1983
清水潤三 「有角石斧の諸問題」 『考古学雑誌』 40-2 1954
以上のほか註3、註4の文献を参考とした。
- 6) 多古町出土例2点のうち1点は県立房総風土記の丘資料館展示。もう1点は稿を改め報告する予定である。
- 6) 『池守・池上遺跡』 埼玉県教育委員会 1984
(2班・千原台事務所)